

佐 渡 巡 検

国 友 尚 子

新潟港を出て2時間余、当初霧^{もや}に煙って見えた緑の孤島が段々と目の前に迫って来る。おけさの調べに迎えられ島に降り立った私達は、集合場所であるバスターミナルへと急いだ。3泊4日の佐渡巡検が始まろうとしていた。

島の表玄関、両津の市街地を抜けると林に囲まれた賀茂湖のほとりに郷土資料館がある。この近代的建物の内部には竹細工を中心とする伝統工芸や漁具、漁法が数多く展示され、島の生活に対する我々の認識を深めてくれた。その後バスは穀倉地帯の国仲平野を抜け、大佐渡スカイラインを通過して佐渡金山跡に立ち寄り再び国道350号線に合流、佐和田、真野と海沿いに走って最初の宿泊地小木に到着した。

翌日は朝9時から歩いて小木港へ向かう。小木民俗博物館、海運資料館、幸(さいわい)丸、考古資料館と立て続けに見学した。江戸時代に金銀の搬出港、物資の積入れ港として発展した小木では、商人や船乗り達の町人^{ちんじん}文化が栄えた。海運資料館に展示されている小木箆^{へら}は和船時代の産物である。角に表に頑丈な鉄金具を嵌め込んだ姿は壮麗であった。11時過ぎのバスで、私達は赤泊へ向かった。

今回最大の巡検地となった赤泊村は、人口3500人の佐渡の中で最も過疎化の進む村である。越後の寺泊と最短距離に位置するため古くから港町として発展したこの村は農漁業を基幹とし、林業、牧畜なども行われているが何れも後継者不足に頭を悩ませている。役場の方のお話によると、最近家族ぐるみでの村へのUターンが増えつつあるものの、農漁業を継ぐ者はごく稀でその殆どが、隣のNEC工場を始めとする村外へ流れてしまうそうだ。かといって村への企業誘致も難しく、対応を迫られている。ふるさと森事業や夏季のシーズン時のイベント、特産品作りなどは盛んで滞在型の観光地化を目指している。ただ優先すべきは道路、港、上水道などの基盤整備であるということであった。

3日目の午前中は、事前学習の担当毎に農協・漁協・森林組合・教育委員会に分かれて聞き取り調査を行った。森林組合を訪問した私達のグループは、佐渡の林業の体質について詳しくお話を伺うことができた。佐渡に12ある林業組合のうち赤泊のものは管理面積は最小ではあるが、切り倒した木材の乾燥場や製材工場を経営したり、住宅建築を斡旋したりと多様な事業を行っている。最近では竹材の生産に変わって椎茸栽培、変わった所では庭園用の松材の需要が増えてきているそうだ。労働力に関しては、地元の林業高校とタイアップした形で、ある程度確保できる仕組みらしい。

村役場の方々のご厚意により、午後はバスで広く村内を案内して頂いた。あいにくの曇り空ではあったが、天狗塚から見下ろす日本海をバックにした豊かな農村風景は雄大で、一大パノラマさながらであった。牧場や柿畑を車窓から眺めつつ、猪(むじな)との禅問答で知られる東光寺を巡る頃には雨も降り始めていたけれどそれ故に趣き深い旅だったと思う。

最終日の朝は自由行動ということで、友人達と赤泊の街を見て歩いた。港の改修に心血を注いだ田辺九郎平翁の家は、今は住む人も居らずしんと静まり返っている。出げた造りと能登瓦の落ち着いた町並は、歴史の重みを感じさせた。

今回の巡検は、日程的にはゆったりとしていたが非常に内容の濃いものだった。米も野菜も魚も肉も自給できる豊かな島、観光化の波の押し寄せる島、過疎に悩む島といったイメージも当初より随分と変わってきたように思うのだが。最後になったがご指導下さった栗原先生、赤泊村諸機関の方々、特にバスでの送迎をはじめ、地酒「白雪」で私達を歓迎して下さいました。心から感謝の意を表したい。

(9月24～27日 栗原教官指導)